

少女時代の思い出 Memories of My Girlhood

亀山 邦子
KAMEYAMA Kuniko

軍国少女時代

私は昭和7年(1932年)東京近郊の千葉市で大学病院勤務の医師の父と専業主婦の母、そして3歳年上の姉のもとに誕生しました。その前年、既に満州事変が始まっていました。そして1937年日中戦争(シナ事変?)、1941年太平洋戦争(大東亜戦争)1945年戦争終結と私の少女時代は戦争一色の時代でした。

それでも小学生時代は、子供は天真爛漫、当時は車の通ることもほとんどない路地で夕方遅くまで遊び回っていました。主導権を握っているのはいつも元気な姉でした。3、4年生ごろから地域ごとに班別に登校、学校到着時には班長である姉の命令のもと、宮城遥拝を義務付けられるなど次第に戦時色が強くなりました。音楽の時間にはアメリカ空軍のB29やP51の爆音を聞き分ける指導も受けました。

そして1945年昭和20年私は小学校を卒業して女学校、(現在の中学校)へと進学しましたが学校の校舎は学校工場と化していて何か軍需物資を生産していましたので私たちはどこで授業を受けていたのか現在全く記憶にありません。当時4年生でした姉は動員されて学校工場で働いていました。ズボン、(当時はモンペと言いました)を履いて両脇に防空頭巾と水筒を下げて登校する姉の姿が何故かおかしくて姉もおどけて一緒に笑い転げたものです。

その年はもう敗戦は必須で3月10日の東京空襲以来、千葉市の上空にも不穏な空気が流れていました、そして6月10日、姉の居る学校工場が爆撃されたのです。当時若い医師は戦場へと駆り出されていたので父は非常事態の責任者となっていたので職場を離れて姉の様子を見に行く訳にはいかず、どんなに心配したことでしょう。それでも夕方姉が無事帰宅した折には家族一同ほっとしたことを覚えています。聞けば当時の校長先生と校医さんが爆撃で亡くなり姉の友人3人も重傷で病院に運ばれたとの事でした。それ以来、姉の性格は一変したと思います、明るくいつも人を笑わせていた姉が生涯、自分を抑えて静かに過ごしていたように思われます。

それからひと月も経たない7月7日夜。私たちの住む千葉市の上空に敵機襲来のサイレンが鳴り響きました。私たち家族、昭和16年に生まれた小さな弟を含めた5人、庭の片隅に掘った防空壕に避難しました。防空壕と言っても素人が掘った穴の上に粗末な屋根をのせたもので皆、肩を寄せ合って座っていらられるだけのものです。その夜の空襲は今までとは違い無差別にあちこちで火の手が上がりました。危険と判断した父が、即、壕を出て農林試験場を目指して

逃げるようにと申しました。農林試験場と言うのは我が家から1キロも離れていたのでしょうか。森に囲まれた試験場で空襲の折にはそこへ逃げるよう取り決めていたのです。父親は責任感からか一人防空壕に残りました。表通りに出ますと同じように農林試験場目指して避難する人でいっぱい。母は4歳になる弟を背負って私と姉ははぐれないようしっかりその後に従いました。戦後、制作されたドラマなどでは空襲から避難する場面では皆、泣き叫んで逃げる様子が見られますが現実とは全く違います。誰一人声もたてない。黙々と子供たちも大人の後について歩いていきました。農林試験場にたどり着くと何故かほっとして街の方を見渡すと我が家の方向の空も真っ赤でした。でも不思議なことに特別の感情がこみ上げてくることもないのです。未だ子供でしたからでしょうか。その時の思いを母に尋ねたこともありません。夜が明け始めて雨が降っていました。これも不思議なことに後から避難してきた父が大勢の避難者の中で迷うことなく突然目の前に現れたのです。

夜もすっかり明けて雨も止んで焼け野原となった我が家へと全員で帰りました。家は無残に跡形もなく焼け落ち、いつも長火鉢の上にかけてあった鉄瓶が一つ、コロンと転がっていたのを鮮明に覚えています。そして父が何故かそれを拾い上げて持ち帰ったことを。

その後、高台にあって焼け残った伯母の家へと歩いて向かう途中、逃げ遅れた人の焼け焦げた屍を目にしました。いぶかりながら見る私を普段、大声を出さない母が「見るのではない！」と激しく叱ったことも覚えています。

後に聞いたことでは私の通った小学校の入り口が地下道になっていたのも、そこへ避難した人々が大勢蒸し焼き状態で亡くなったそうです。私の幼稚園からの友人もこの空襲で命を落とされました。友人の弟さんは焼夷弾の直撃で亡くなられ、お母様は御自分も脚を失くすほどの大けがをなさりながら、彼の亡骸を引きずりながら避難なさったそうです。

1945年8月アメリカの原爆投下によって、この戦争も終わりました。それから80年、戦後の筆舌に尽くせない辛い時期も乗り越えて日本は今、平和な日々を送っておりますが、ウクライナでもパレスチナでも戦禍は絶えず、第3次世界戦争に迄発展するやもしれないと危惧されています。歴史を振り返ってみても世界中に戦争のなかった時代があったのでしょうか。次々と新しい兵器は開発され人類滅亡へと向かっていくのでしょうか。

戦時中に私が過ごした小学校の担任の先生が未だ意味もよく理解できない私たちに

「四方の海、みなはらからと思ふのに など波風の立ちさわぐらむ」と言う明治天皇御製を教えて下さいました。先生は当時、強いられていた軍国教育とは裏腹に心の底から平和を願っていたらしたと今になって思うのです。そして、今もこの御歌は当時、下校時には必ず、合唱した「海ゆかば」と共に私の心に深く、深く残っているのです。